

ジャガイモと映画

<ポテトチップス1>

Webジャガイモ博物館館長

あさま かずお
浅間 和夫

21 ポテチ

2012年、邦画。監督：中村義洋。

ジャガイモの出てくる映画を探している筆者にとって、このずばり『ポテチ』を冠した映画は見落とすわけにはいかない。2012年5月16日札幌シネマフロンティアに向かった。

仙台に住む伊坂幸太郎の短編集「フィッシュストーリー」（新潮社刊）に収められた一編「ポテチ」をこれまで伊坂作品を数多く手掛けてきた中村義洋監督が、濱田岳を主演とし、オール仙台ロケにより映画化したもの。同じく、過去の伊坂作品の音楽を担当してきたミュージシャンの斉藤和義が音楽を担当した。

後半に判ることだが、全く同じ日に同じ病院で生まれ、一方はプロ野球選手、もう一人は空き巣泥棒と全く違う人生を歩むことになった二人の男の運命を独特のタッチで描き出したもの。

濱田岳が演ずる今村が、仕事にかかっていた電話に出たため、ビルから飛び降り自殺をしようとした若菜（木村文乃）と仲良くなり、一緒にプロ野球の尾崎選手の留守宅に侵入する。

今村はニュートンの名も知らぬ科学オンチであるが、探偵役の黒澤（大森南朋）の助けで同じ年、同じ日に仙台市で生まれた

プロ野球選手尾崎との関係を明らかにしていく。

ポテトチップスが出てくるのは、車の中。テンションが上がり『腹が立ったら、腹が減った』と今村がコンソメ味と塩味を買ってきて若菜とバリバリと食べる。若菜はポテトチップスが大好きであり、今村の分まで食べてしまい、泣きだされるシーンもある。

今村が強い関心を持つ野球選手を美人局^{つつもたせ}で騙そうとする男女と戦い、野球チームの監督の女ぐせの悪さを利用して尾崎選手を代打に出すことを約束させる……。

22 七年目の浮気（原題：The Seven Year Itch）

1955年アメリカ映画。監督：ビリー・ワイルダー。

地下鉄通過時に換気孔から出てくる涼しい風をスカートの下に受けつつ、「今度の方が前のより涼しいわ。きっと急行ね」と言いながら、まくれ上がったスカートを両手で押さえるあのマリリン・モンローのポーズは、読者もお忘れでないはず。

エアコンを持たないアパートの部屋に住む“ブロンド美女”の下には、結婚7年目で浮気の虫ウズウズ（Itch）している男リチャードが一人である。ある日、女がトマ

トの植木鉢を落としたため、そのお詫びにと左手に輸入もののシャンパン、右手に袋入りポテトチップスを持って、「よかったら一杯どうですか」と現れる（写真1）。普段は下着を冷蔵庫に入れて冷やしている彼女だが、エアコンのある彼の部屋に始めて入ってくる。



写真1 七年目の浮気

実はこの少し前、「俺は幸福だ。ヘレンは得難い妻だ。酒、タバコ、女はやらないぞ」、と考えて、酒などを入れたロッカーの鍵を本棚の上に投げ上げて置いていた男であったが、シャンパンにチップスを食べ、一緒にピアノを弾いていくうちに・・・美しさに負けて襲いかかりそうになるため、チップスを持ってお引き取り願うことになる。

ポテトチップスは、1853年7月ジョージ・クラムというフランス人コック長によりア

メリカで偶然発明された。そのきっかけはこうであった。

上流階級が集まるニューヨーク州東部の温泉保養の地のサラトガ・スプリングス（Saratoga Springs）にあるケアリームーンズ・レイクホテルでの話。お客の一人から、出したフライドポテトが厚過ぎるとの苦情を受けた。自慢の料理を侮辱されたコック長は、次にその客が来たとき、客の望み通り、いやそれ以上に薄くスライスして揚げることにした。大皿一杯にそのフライドポテトを盛り、お客の反応を待ったところ、この初めてのポテトチップスは大いにうけた。これがあちこちで試みられるようになり、サラトガ・チップスと呼ばれるようになった。なお、1976年7月にはこのホテルの跡に記念碑が建てられた。

ついでに、日本人で最初にポテトチップを食べたのは誰か関心のあるところだ。

1872（明治5）年の旧暦5月、岩倉具視^{ともみ}、木戸孝允^{たかよし}、大久保利通^{としみち}らが米・欧を廻る途中にこのサラトガ・スプリングスに立ち寄り、サツマイモを揚げたものと勘違いして食べたことが最初とされている。

（岩波文庫『特命全権大使米欧回覧実記（一）』289p）

また、わが国で初めてポテトチップスを製造した人は、濱田音四郎と言う人。和歌山県出身、1911（明治44）年生まれ、昭和の初めに外航船の船員になり、ハワイで、ポテトチップスの製造に携わった経験があり、太平洋戦争中には日系人収容所に入れられていたが1946年に帰国した。

食糧事情の悪さにショックを受けた後、意を決して上京。健康を担保に銀行から融資を得て、1950（昭和25）年に新宿区納戸

町に小規模バッチ式手揚げの「アメリカン・ポテトチップ」と言う工場を建て、『フラ印』^{じるし}と言うチップスを製造した。最初は米軍のキャンプに納品することが多かったが、1953年の朝鮮戦争休戦とバイ・アメリカン政策の影響を受け、国内向け販売へと転換をせまられた。濱田社長は帝国ホテルに最高のものを納める外、各地のビヤホールなどを回って、宣伝に努めたため、まもなく順調に売れるようになった。この後、1962年湖池屋、1964年菊水堂が後を追うなどして、スーパーの普及とともにスナックのひとつとしてしだいによく知られるようになり、1975（昭和50）年のカルビー参入により需要は一層拡大していった。

23 旅情（原題：Summertime）

1955年、イギリス。監督：デビット・リン。

アメリカのいわゆるオールドミスのジェーン（キャサリン・ヘプバーン）は長い秘書生活で青春をすり減らしていた。ようやくヨーロッパ見物の夢を実現し、ロンドンとパリーを観光後、陸路で高揚した気持ちを抱いてベニスに入ってくる。

女の一人旅は、初めのうちは見るものすべてが珍しかったが、やがて孤独感に包まれる日々がやってくる。

そんな時、サン・マルコ広場の喫茶店で、彼女をジッと見るレナード（ロッサノ・ブラッツィ）がいた。翌日赤いゴブレットを見つけて購入しようと骨董品店に入ったところ、彼が店主でいて、付き合いが始まることになる。

しかし、彼の息子と会い、彼に妻もいることを知る。そこでやけ酒を飲むことにな

るのであるが、画家の夫に女ができたと泣く女と並んで腰掛けるシーンがでてくる。「冷めたポテトチップよ」とすすめ、大きめのガラスの皿に入ったチップスをつまむ。（写真2）。



写真2 旅情

ホテル（ペンシオーネ・フィオーリーニ）へ追ってきたレナードは妻とは別居していると言い、夢のような夜を過ごす。このままでは別れられなくなりそうな自分の気持ちを恐れ、急にサンタルチア駅を発つことにする。そのラスト・シーンと時々背景に流れるメロディ『Summertime In Venice』が昔の青年の心に染み込んだものだった。小遣い稼ぎに案内役をしたい少年との交流も味となり、気になる人の店をアメリカ製16mm映写機に収めようとして運河に落ちるシーンはよく知られている。この撮影で目に細菌が入って、96歳で亡くなるまで完治しなかったという後日談も生まれた。

なお、以前書いたように、ポテトチップは英語ではクリスプ crisp と言う。同様にクッキー cookie はビスケット biscuit、デザート dessert はスイーツ sweets で通用する。